

感謝表現研究の概観
—日本語教育への応用に向けて—

市原 明日香*

A review of research on gratitude:
Applied to teaching Japanese as a second language

ICHIHARA Asuka

Abstract

The purpose of this paper is to summarize the intercultural research of Japanese gratitude expressions and to suggest further ideas on what concepts could be applied to teaching Japanese as a second language. First, I review the theoretical background of the pragmatics of gratitude. Then, I discuss contrastive linguistics studies focusing on Japanese. In the final analysis it is revealed that the Japanese language has a comparatively wider application for human relationships or things, and the situations in which those utterances take place are more frequent than other languages. Furthermore, it has various speech formula and expression strategies.

However, contrastive studies are limited to a few papers, most of them are compared with English language or Korean. Besides, most of those studies are about the use of apology as substitute expression of gratitude. Also, there is a lack of scholarship on Japanese learner's pragmatic transfer. In the future, the wider aspects of Japanese gratitude expressions should be investigated.

Keywords : expression of gratitude, strategy, pragmatic transfer, intercultural pragmatics, the substitute of apology expression as gratitude

1. はじめに

「感謝すること」は、「詫び」「依頼」「断り」等の発話行為と同様に人間関係の維持や構築に直接的に関わっている (Austin 1962)。問題なく感謝の発話行為を遂行することは、コミュニケーション上、不可欠な言語能力である。ところが、学習者にとって様々な状況で適切に感謝することは、そう単純なことではない。定型表現の選択および非定型表現の使用は、相手との人間関係によってどう変わるのか、何に対して感謝するのか、感謝する場面をどう理解するか等に依存しており、多様な要素が絡み合っている。また、それらは感謝を表明しないことも含めて個々の言語とその背景にある社会慣習に依拠している。

このような学習上の困難がありながら、日本語の感謝表現研究は他の発話行為と比べると、学習者を対象とした研究が少ない。先行研究を見ると対照言語学や比較社会言語学によって得られた知見に、日本語教育学への応用可能性が考えられる。特に感謝のコミュニケーションを遂行するために重要なのは語用論上の知識と運用力であると言える。語彙の問題ではなく、発話行為としての感謝表現を研究しなければならない。そのため、本稿ではまず、語用論の理論および異文化間語用論において、どのような分析枠組みによって何が明らかにされてきた

キーワード：感謝表現、ストラテジー、語用の転移、異文化間語用論、詫び表現の代替

*平成27年度生 比較社会文化学専攻

のかを検討し、さらに日本語学習者を対象とした中間言語語用論研究へ向けての課題を考察する。

2. 語用論の理論からみた感謝表現

「感謝」は、「話し手にとって聞き手によってなされた過去の行為に利益があったことに基づいて為される発話内行為」と定義される (Searle 1975)。Goffman (1967) は、個人が潜在的に他者に対して感情的応答をすることがfaceに関係していることを説明し、社会的な相互の儀礼の重要性を述べた。Leech (1983) は、感謝を「社交的な機能」、すなわち助力に感謝し、礼儀正しさと社会的雰囲気維持する目的とするものと捉えている。Brown & Levinson (1987) は感謝表現をFTAとしている (清水 2009)。話し手が聞き手に対する恩義を認めることは、話し手にとってのnegative faceを脅かす。だが、それは同時に感謝の受け手である相手のpositive faceでもあると考えられる。すなわち「好ましいと思ってほしい」というfaceを満たす言語行動でもある。FTAは話し手と聞き手の「社会的距離」、「相手への力」、「負荷」の理解によってその度合いが変化する。したがって感謝は送り手と受け手との間の複雑な相互行為である (Eisenstein & Bodman 1993)。

Thomas (1983) によれば、非母語話者が行き当たる言語行為の異文化間理解の困難さは「語用言語学的失敗」と「社会言語学的失敗」に分けられる。前者は言語的限界のことで、例えば、日本人が感謝をするつもりで英語でI am sorryと言っても感謝の意図が伝わらないことなどである。後者は社会慣習や価値観をL2 (学習言語) の文化にも不適切に適用することによる。例えば日本人が「親しき仲にも礼儀あり」と考え、韓国人の親しい友人に対して「ありがとう」を多用し、友情を壊しかねないことなどであろう。これは学習者が言語を習得していても、コミュニケーション上、適切に使用できるとは限らないことを示唆している¹。

3. 異文化間語用論としての感謝表現研究

異文化間語用論は複数言語を対象とする広がりをもつものであるが、日本語では対照言語学として二言語を比較したものがほとんどであるので、ここでは区別せずに扱う。異文化間語用論は英語学習者の研究から始まり、英語を対象としたものが大半を占めている。

3-1 英語と他言語の対照研究

Eisenstein & Bodman (以下E & Bとする) (1993) は英語学習者には自然な感謝の場面が、母語話者には抵抗感を感じる例を述べている。事例は12言語に及び、贈り物をその場で開けて感謝を示すかどうか、電話や手紙のように後で再び感謝することは元の感謝と同じく重要であるか、家族に対して感謝するか、感謝と理解されない直訳の例などである。このような現象は日本語学習者と日本語母語話者間においても見られるのだろうか。

3-2 日本語と他言語の対照研究

Coulmas (1981) と Hinkel (1994) は、恩義を伴うものとそうではない感謝があり、社会的恩義に敏感な文化の例として日本語を挙げている。Coulmas (1981) は、日本人は些細な親切や好意にも「恩義」を感じることから、借りを返さなければならない認識の表明として「すみません」を使うと分析した。それ以来、日本語の感謝表現は、詫び表現「すみません」が代用される現象すなわち「詫び表現の交替」が中心的な課題とされてきた (中田 1989, Ide 1989, Okamoto & Robinson 1997, Kumatoridani 1999, 谷口 2010など)。表1に、感謝表現の語用を焦点とした対照研究をまとめた²。対照言語は6言語あったが、半数が英語と韓国語で占められている。

英語と比較すると、日本語は幅広い人間関係で使用し (中田 1989, 吉田 1995)、詫びの意識が表れる (三宅 1992 & 1994a & 1994b)。英語では感謝される側に言及するが、日本語では「くれる」「もらう」の恩恵動詞を使用し、感謝する側の受益に焦点がある (Ohashi 2013)。韓国語では、感謝表現の表出は親しい相手に対して日本語よりも頻度が低い (生越 1994, 尾崎 2005)。「配布物を受け取る」等の恩恵の軽い場面で韓国語は何も言わない (李 2012)。日本語は定型表現の使用量と種類数が韓国語よりも多く、親疎・上下関係に関わらず定型表

表1. 日本語感謝表現の異文化間語用論研究(言語別発行年順)³

著者(年)	言語	研究目的、課題	データ	結果
中田(1989)	[ア英][日]	詫び表現の交替	映画・ドラマのシナリオ/インタビュー	[日]社交辞令あり。[英]具体的対象のみ。 [日]家族、部下、友人に代わって述べる。 [英]家族以外では代理で述べない。「恐れ入ります」「お世話になっています/なりました」「ごちそうさま」にあたる表現なし。
三宅(1992)	[イ英] [ア英] [日]	詫び型、挨拶型、感謝型の選択	質問紙調査	[イ英]あいさつと感じながら感謝表現や詫び表現を使うことが[ア英]よりも多い。 [日]は感謝と詫びを同時に意識。
三宅(1994a&b)	[イ英][日]	詫び表現の交替	質問紙調査	[日]詫び以外の場面でも詫び表現を多用する。疎で目上に対して顕著。
吉田(1995)	[ア英][日]	親疎・上下関係による表現の選択	質問紙調査	[日]相手に応じて使い分ける敬語システムと関係がある。丁寧度意識は「クラスの顔見知り」「先輩」で[日]が高い。
Ohashi(2013)	[イ英][日]	意味公式の差異	質問紙調査(DCT談話完成テスト)	[日]自らの利益や受け手に言及。「くれる」「もらう」恩恵動詞を使用。受け手が恩恵を否定、詫び表現「ごめん」「悪い」、返礼「こちらこそ」を使用。 [イ英]相手の利益や与え手に言及。再会時には使用しない。
生越(1994)	[韓][日]	親疎・上下関係による表現の選択	小説・シナリオ	[日]ウチの親しい関係で多用される。 [韓]ウチの関係(友人・夫婦・家族)には使用しない。目上の人に使用する。
秦(2000)	[韓][日]	定型表現と非定型のストラテジー	映画・ドラマのシナリオ	定型表現の使用量と種類数:[日]>[韓] 非定型のストラテジーのみ使用:[韓]>[日] 断りのやわらげ:[日]使用。[韓]なし。 気遣いや励ましの定型化表現に対する応答:[日]使用。[韓]なし。
秦(2002)	[韓][日]	親疎・上下関係に見る定型表現と非定型のストラテジー	映画・ドラマのシナリオ	[日]親疎上下の差異なく定型表現。 [韓]親しい関係になると非定型のストラテジーが増える。上下関係では表現選択に差異なし。
尾崎(2005)	[韓][日]	親疎関係による表現の選択	質問紙調査	[韓]家族に対してや、ソウル市民はお礼を言語行動にしない率が少し上がるが[日][韓]で有意差はなし。
李(2012)	[韓][日]	言語行動の有無	質問紙調査	[日]負担の程度や親疎に関係なく言語行動 [韓]負担の軽い場面では非言語行動で示す。あるいは何も表現しない。
胡(2003)	[中][日]	語用の差異	内省	[中]家族には言わない。おみやげはもらった時だけ言い、後日は言わない。お返しはすぐにはしない。
田中(2006)	[中][日]	定型表現と非定型のストラテジー	質問紙調査(DCT談話完成テスト)	[日]定型表現・非定型表現ともに[中(台湾)]の1.3倍の使用量。 詫び表現:[日]32%[中]15% 負担に関する言及:[日]2倍>[中] 利益を受けたことの表出:[日]100回[中]1回
李(2014)	[中][日]	バリエーションの差異/再度の感謝と事前の感謝	ドラマのシナリオ/質問紙調査	[日]謝罪表現を単独で使う。 [中]ウチの関係で不使用。謝罪と感謝の混在型はあるが、謝罪表現は単独では使用しない。 [日]再度の感謝を行う。事前の感謝を行わない。 [中]再度の感謝の頻度が低い。事前の感謝を行う。
熊崎(1997)	[ブ][日] [日系ブ]	言語行動の有無	質問紙調査	ごちそうのお礼を後日も言うか。どう言うか:[日]当然の礼儀[ブ]日系人には言うが非日系人には言わない。お礼を言う理由は[ブ]「日系ブ」「世代」で異なる。
スィリラット(2011)	[タイ][日]	詫び表現の交替	質問紙調査/インタビュー	[日]様々な感謝表現を使用。依頼場面と疎の関係で詫び表現が使用される。 [タ]依頼場面や負担度大の場面も定型表現。
ランブクピティヤ(2014a & 2014b & 2014c)	[日] [シンハラ]	親疎・上下関係に見る定型表現と非定型のストラテジー	ロールプレイ/インタビュー	[日]どの関係・場面も定型表現。 回数:[日]>[シ] 親:[シ]表出しない。非定型表現。 上位:[シ]表出する。

現を使用するが、韓国語は親しい関係になると非定型のストラテジーが増える(秦 2000&2002)。これらの研究結果は、友人におごってもらった時に日本ではすぐお礼を言うのが礼儀だが、韓国人ならそれは嫌な気持ちになること(生越 1995)を実証している。韓国語にはない使用としては、日本語では断りの意味や、気遣いや励ましの表現(「がんばって」等)への応答として使うことがある。一方、韓国語は日本語と異なり、サービス業者に対して感謝表現で応答する(秦 2002)。シンハラ語との対照研究でも、日本語は会話の中での感謝表現の使用回数が多く、あらゆる場面で使用する。日本語が親疎・上下関係に関わらず定型表現を使用するのに対し、シンハラ語は親しい関係の場合、感謝の表出をしないか非定型表現を使う(ランブクピティヤ 2014a & 2014b & 2014c)。中国語でもシンハラ語と同様の傾向がある。中国語にも詫び表現の交替が同様に見られるが、全体的に日本語のほうが感謝の回数も多く、定型表現が豊富でストラテジーの使用も多い(田中 2006)。贈答品はその場では開けず、お返しをすぐにするのは失礼にあたり(胡 2003)、後日の再度の感謝を日本語のように行わない(李 2014)。タイ語と比較しても、日本語のほうが感謝表現のバリエーションが豊富である(スィリラット 2011)。ブラジルでは、ごちそうのお礼を後日も言うことを日本人の礼儀と見なしているが、再度のごちそうの催促に聞こえるので非日系人には言わないと回答している(熊崎 1997)。

以上の他言語との比較から、日本語の感謝表現は定型表現および使用する場面が多様で、幅広い人間関係で使用すると言える。そのため、学習者が感謝表現を自らの母語でのコミュニケーションと同様に行う場合、日本語母語話者に感謝が不十分であるという印象を与えかねないことが推察される。

4. 中間言語語用論のために一学習者を対象とした感謝表現研究

管見の限り、中間言語語用論や第二言語習得研究の領域で日本語の感謝を論じる研究は見当たらないが、第二言語習得研究への接続が期待できるものとして語用の転移についての調査がある。ここでは日本語母語話者の負の語用の転移および日本語学習者の語用の転移について概観する。

4-1 日本語母語の英語学習者についての研究

E & B (1986) の英語学習者を対象とした研究では、英語母語話者がどの程度学習者の発話を容認できるのかという評価基準を作って15言語の学習者を調査し、多数を占める5言語を比較した。その結果、上級者に対しても容認度は低く、日本人の発話に対して容認できるとする評価は約30%と最も低かった。Nakai & Watanabe (2002) の調査によれば、日本語の語用の転移の特徴としては、thank you very muchが多すぎて英語母語話者には下手に(awkward)聞こえること、以前ごちそうされたことに対して再感謝をすること、上位の者に長い発話を行うこと等である。アメリカ滞在期間が長く、英語レベルが高い者も同様であったことから、マイナスの語用の転移は長年そこで生活していても消えないこと(Kasper 1992)を示した。

4-2 日本語学習者についての研究

日比野&長友(2000)の多国籍の留学生を対象とした質問紙調査では、初級学習者は母語の表現をそのまま日本語に置き換えているが、上級になると感謝場面でも詫び表現を併用し、母語話者に近い表現になる。孫(2007)はJSL(日本留学中の学習者)とJFL(在中国の学習者)に質問紙調査を行った。両者とも詫び表現を使用する率が低いが、JSLの上級者は母語話者に表現が類似する。その理由は、初級では感謝場面での「すみません」の使用を学ばないからだとしている。これらの研究は、学習者のレベルや学習環境が語用の適切性と有意に関連しているとはいえないというKasper(1992)の主張と異なっている点で興味をひく。そのほかに、金(1995)は、韓国人日本語学習者の副詞の使用率を母語話者と比較した。「どうも」の使用頻度が高いことは、これに相当する語が韓国語にもあり、丁寧さの使い分けで使用されているので習得が容易であることや日本語教育の影響から説明している。孫(2007)と金(1995)の言う日本語教育の影響については内省による説明であるが、実証データが得られれば中間言語語用論としての進展が可能であろう。

5. 感謝表現研究における分析枠組み

語彙研究ではなく会話のやりとりの中での感謝表現を研究したものは、談話上の機能、ストラテジー、親疎・上下関係を分析枠組みとしている。コミュニケーションとしての感謝表現を考察するために、これらの枠組みにより明らかになっていることを検討する。

5-1 談話上の機能

Hymes (1971) は、thank you はイギリス英語はアメリカ英語と比較すると、感謝の表明であるよりも、formal marker として使用されていることを述べている。Rubin (1983) は、thank you を使用した自然データを集め、「ほめ」の談話や「終了」のために使われているとする。こうした談話の機能は日本語においても言えるのではないかと。中道 & 土井 (1994) は、国立国語研究所 (1994) の教材から、感謝表現の機能が「断り等のやわらげ」や「注目表示」に使用されており、談話全体では、「接触の開始」「接触の終了」「話題の開始」「話題の収束」の4機能があるとしている。これらの機能が実際によく使われているとすれば日本語教育の実践のためにも解明されなければならない。

5-2 ストラテジー

ここで言うストラテジーとは、Fraser (1981) の定義にしたがって、発話行為を実現する意味的なレベルでの表現ストラテジーという意味で捉える。E & B (1986) は英語母語話者に調査紙調査を行い、発話機能を分類した。コーディングは van Ek (1976) と Searle (1969) に追加して行われた。それによれば、感謝表現は単独で使われるよりも組み合わせで使われることで、特定の場面での適切な感謝が遂行される。例えば、プレゼントをもらったことへの発話、“Oh, you know me so well, Thanks, I love it.” には、<驚きの表明+ほめ+お礼+好ましさの表明>の機能が組み合わさった発話行為セットである。これらは恩義の気持ちや驚きの気持ちが強いと数が増える傾向がある。また、決まった順序があるわけではない (E & B 1986: 171)。表2にE & B (1986 & 1993) による英語の感謝ストラテジー、表3に中田 (1989) による日本語の感謝ストラテジーを示す。各分類は詳細だが、表現の内容を見ると、感情を表しているもの、行動の意志を表明しているもの、感謝の対象を評価しているものに整理できる。比較するため「大分類」を筆者が追加した。

表2. Eisenstein & Bodmanによる英語の感謝ストラテジー

大分類	E & Bによる分類	例 (和訳は筆者)
感情	1. お礼 2. 感謝の表明 3. 驚きの表明 4. 満足の表明 5. 安堵の表明 6. 呼びかけ 7. 誇張 8. 非言語	1. 「ありがとう」 2. 「感謝します」 3. 「えー」「わあ」 4. 「楽しかったです」 5. 「助かった」 6. 「～さん」 7. 「あなたは命の恩人だ」 8. 笑う。キスする。
行動	9. 安心させる 10. 返済の約束 11. お返し の約束・申し出 12. 恩義の表明 13. 関係継続希望の表明	9. 「なるべく早く返します」 10. 「月曜日までに返します」 11. 「次は私がおごります」 12. 「決して忘れません」 13. 「また近いうち是非一緒しましょう」
評価	14. 人・事・物へのほめ 15. 必要性・ 義務がないことの表明 16. 好ましさの 表明	14. 「ご親切に」「すばらしい」「おいしかった」 15. 「そんなことしなくてよかったのに」 16. 「好きな色です」「ここで働くのが好きです」

E & B (1986: pp.180-183 & 1993: pp.66-67) より筆者作成

表3. 中田 (1989: pp.197-198) による日本語の感謝ストラテジー

大分類	中田による分類	発話例
感情	1. 感謝行為遂行的 2. 相手の行為に対する話し手の気持ち・状態の表明	1. 「感謝します」「お礼を言います」「サンキュー」 2. 「すみません」「悪い」「恐縮です」
行動	3. 返済の意思の表明	3. 「恩にきます」
評価	4. 相手の行為の評価 5. 相手の評価	4. 「ありがたい」「ご苦労」 5. 該当なし。
挨拶?	6. 受益の事実の表明	6. 「お世話になっています/なりました」「ごちそうさま」

中田 (1989) がシナリオのデータを分類したところ、日本語には「相手の評価」にあたる発話が見られなかった (表3の5)。英語になく日本語にあるものは「相手の行為に対する話し手の気持ち」のうち申し訳なさを示す「すみません」と「受益の事実」「返済の意思」だという。E & B (表2) と比較すると、「申し訳なさの表明」(表3の2の発話例) と「受益の事実の表明」(表3の6) は日本語の感謝の分類において現れたものである。

熊取谷 (1994) は、適切性条件によってストラテジーを整理し、談話レベルでないと観察できないものを挙げている (表4)。熊取谷によれば、「すみません」は、自分の有益状況を相手の不快状況として捉える視点の移動によって引き起こされ、丁寧行動の一つとして機能する (表4の7)。また、Schegloff & Sacks (1973) が示した前終結 (pre-closing) を感謝表現が形成することから、会話を終結に導く談話構成上の機能をもっている (表4の8) と考察している。

熊取谷 (1994) の分類をもとに、赤堀 (1995) は日本語教育への応用を目的として細分類した (表5)。データは大学生30人の小規模な質問紙調査であるが19種類ものストラテジーが見られた。直接的表明 (表5の2-b) を核として、その前後で複数のストラテジーのセットがあった。赤堀 (1995) はさらに1分半の電話会話データに5種類のストラテジーを観察した。

表4. 熊取谷 (1994 : pp.66-68) による日本語の感謝ストラテジー

熊取谷による分類	発話例
1 感謝する旨の表明	「感謝致します」「お礼申し上げます」
2 感謝する意思・希望・必要性がある旨の表明	「ここに感謝の意を表します」「感謝の意を表したいと思えます」「おじさん、坊やにお礼を言わなくっちゃいけませんね」
3 聞き手が発話者に行為Aを行った旨の言述	「本当にお世話になりました」「いつもお世話になりました」「いろいろご教示いただきまして」
4 聞き手が発話者に益をもたらした旨の言述	「大変助かりました」「おかげさまで」
5 嬉しく思う、ありがたく思う、の言述	「本当にうれしく思っております」
6 聞き手あるいはその行為に対する賛辞 (肯定的評価を与える)	「これはご丁寧に」「これはご親切に」
7 視点の移動による丁寧行動	「すみません」
8 会話の前終結 (pre-closing) を形成	A : ありがとうございます。 B : はい。遅いから気をつけて帰ってね。

表5. 赤堀 (1995 : pp.53-54) と秦 (2002 : pp.73-74) による日本語の感謝ストラテジー

赤堀による分類	発話例 (赤堀)	秦による分類
1 感謝行為に関する言及 a. 感謝する旨の表明 b. 感謝の必要性の表明 c. 感謝の意志の表明 d. 感謝の方法を知らない旨の表明	a. 「ご協力に感謝します」 b. 「あなたには感謝しなくちゃね」 c. 「昨日のお礼を言いたくて」 d. 「何とお礼を言えればいいのか」	言葉にできないことへの言及 (1 dに同じ)
2 心的態度の表明 a. 驚き・喜びの気持ち b. 感謝の気持ちの直接的表明 c. 恐縮の念やすまないという気持ちの表明	a. 「いやーうれしいわ」 b. 「ありがとうございます」 c. 「すみません」	直接的な感情の表出
3 感謝の対象事物への言及	「わたしにまで気を使ってくれて」	なし
4 負担に関する言及 a. 相手の負担への言及 b. 負担をかける/かけた旨への言及 c. 行為・気遣いへの不必要性への言及	a. 「これ手に入れるの大変だったんじゃないんですか」 b. 「お手数かけました」 c. 「気を使わんでもええに」	負担に関する言及
5 利益に関する言及 a. 利益内容への言及 b. 利益の有効利用に関する言及	a. 「何とか間に合ったわ」 b. 「ぜひ参考にさせていただきます」	利益に関する言及
6 返恩の申し出	「今度晩飯おごるわ」	お返しへの言及
7 プラス評価 a. 相手自身へのプラス評価 b. 関係事物へのプラス評価 c. 念願の事物である旨の表明	a. 「さすがー、お父さん」 b. 「おもしろそうやなー」 c. 「これ見たいなー思ってたてん」	プラス評価
8 相手 (またはそのウチの人物) が受益者であることの明示 a. 利益のもたらし手の明示 b. 相手の存在、行為の不可欠性への言及	a. 「あんたのおかげよ」 b. 「～ちゃんがいなかったら間に合わなかったよ」	話し手側の必要性・不可欠性への言及

秦 (2002) は日韓のシナリオから抽出した感謝場面を7つのストラテジーに分類した。赤堀 (1995) の質問紙調査データと秦 (2002) のシナリオデータによるそれぞれの研究から、中田 (1989) が観察していなかった「相手の評価」(表3の5、表5の7a)は見られるが、E&Bの英語の分類(表2)には無い「負担に関する言及」(表5の4)が日本語に見られることがわかった。

E & B (1993) は、感謝の受け手もストラテジーを使用して、感謝の発話行為を支えていることに注目している。例えば、金を貸す際に「少ないんだけど」と言って自分の行為を過小評価すること (downplaying) や安心させること (reassure)、贈答品を渡した際に「気に入った?」などと言って感謝の言葉を誘発 (prompt) すること、急に話題を変えて相手の感謝を終了させることである。Ohashi (2013) によれば日本語でも感謝の受け手による相手の恩義の負担を軽減するやりとりが表れるが、E & B (1993) に表れていないのは、否定「いえいえ」と返礼「こちらこそ」である。感謝の受け手は与えた恩恵を否定したり詫びたり感謝を返すことで恩恵関係の不均衡を再調整する (Ohashi 2013)。

以上のように、先行研究のストラテジー分類を比較することで、日本語の感謝表現は詫び表現の代替だけでなく、定型表現による「受益の事実の表明」と「負担に関する言及」が特徴として挙げられることがわかった。

5-3 親疎・上下関係

3.2で見たように、日本語の感謝表現は「親」の人間関係にも多用され、「ウチ」の意識から使用場面が拡大する。英語との対照研究では、日本語は社交辞令に近い挨拶で言うこともあれば、話し手がウチの者 (家族・部下・友人) に代わって感謝を述べる行為や、感謝の受け手のウチの者が当人に代わって感謝を受けることもある (中田 1989)。人間関係の意識は使用するストラテジーにも影響する。目上に対しては、詫び表現の交替が顕著に多い傾向がある (三宅 1992)⁴。利益や負担が大きな場面や公的場面、配慮が必要な相手に対しては、多様なストラテジーが使用されて発話が長くなる (赤堀 1995)⁵。このように、他者と自らの関係の位置づけ方と、それにより使用する表現とストラテジーをどう選択するのが適切なのかが、他言語と日本語で異なるのであれば、日本語学習者にとって習得は単純なものではないだろう。

6. まとめ

日本語の感謝表現を他言語と比べると、感謝対象の物事や人間関係の範囲が広いこと、他言語で感謝を表明しない場面でも表明することやその逆もあること、定型表現とストラテジーが豊富にあることがわかった。しかし、対照言語数は少なく、研究目的は「詫び表現の交替」に偏っているため、概観してきたように解明されていない課題は多い。日本語学習者の語用の転移や語用の習得を中心課題とするものは、管見の限り見当たらない。今後これらの研究が進展すれば、日本語の談話の特徴がさらに明らかになり、日本語教育への応用も期待できると考える。

【註】

1. 感謝表現が重要な役割をはたす発話行為として「ほめ」と「断り」がある。「ほめ」の応答としては横田 (1986)、Chen (1993)、清水 (2012) がある。「断り」の表現は秦 (2000) などがある。
2. 詫び表現が中心的課題になっているものを除いた。
3. 表中の省略記号を以下に示す。[日]: 日本語、[ア英]: アメリカ英語、[イ英]: イギリス英語、[韓]: 韓国語、[中]: 中国語、[ブ]: ブラジル人 (ポルトガル語)、[日系ブ]: 日系ブラジル人、[タイ][タ]: タイ語、[シンハラ][シ]: シンハラ語
4. この傾向は若い世代のみ見られるとする研究もある (小川 1995)。また、詫び表現の選択基準として、敬語すなわち丁寧体か普通体かの二者択一選択のシステムとの関連が指摘されている (吉田 1995)。また、詫び表現の交替は日本語のみの現象ではなく中国語にも少し見られる (田中 2006、李 2014)。
5. 男女別では、日本語母語話者の感謝表現の選択は有意差が見られないことが示されている (小川 1995、尾崎 2005、スイリラット 2011)。

【参考文献一覧】

- Austin, J. (1962) *How to do things with words*. Harvard and Oxford: Oxford University Press.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987) *Politeness: some universals in language usage*, Cambridge University Press. (邦訳: ブラウン&レヴィンソン, 田中典子 (訳) (2011) 『ポライトネス—言語使用における、ある普遍現象』 研究社)
- Chen, R. (1993) Responding to compliments: A contrastive study of politeness strategies between American English and Chinese speakers. *Journal of Pragmatics*, 20, 49-75.
- Coulmas, F. (1981) Poison to your soul: Thanks and Apologies contrastively viewed. *Conversational Routine*, The Hague: Mouton.
- Eisenstein, M. & Bodman, J. (1986) "I very appreciate" : Expressions of gratitude by native and non-native speakers of American English. *Applied Linguistics*, 7(2), 167-185.
- Eisenstein, M. & Bodman, J. (1993) Expressing Gratitude in American English, In Kasper & Blum-Kulka (eds.), *Interlanguage Pragmatics*, Oxford University Press.
- Fraser, B. (1981) On Apologizing. In Coulmas (eds.) *Conversational Routine*, The Hague: Mouton.
- Goffman, E. (1967) *Interaction Ritual: Essays on face-to-face Behavior*. Garden City, NY: Doubleday.
- Hinkel, E. (1994) Pragmatics of intention: Expressing thanks in a second language. *Applied Language Learning*, 5(1), 73-91.
- Hymes, D. (1971) 'On communicative competence' In Pride and Holmes (eds.) *Sociolinguistics*. London: Penguin.
- Ide, S. (1989) Formal forms and discernment: Two neglected aspects of universals of linguistic politeness. *Multilingua*, 8(2/3), 223-248.
- Kasper, G. (1992) Pragmatic Transfer. *Second Language Research*, 8(3), 203-230.
- Kumatoridani, T. (1999) Alternation and co-occurrence in Japanese thanks. *Journal of Pragmatics*, 31, 623-642.
- Leech, G. (1983) *Principals of pragmatics*, London: Longman.
- Nakai, M. & Watanabe, Y. (2002) Too Many "Thank you very much" : A study on the interlanguage expressions of gratitude by Japanese speakers of English. 語学教育研究論叢 19, 153-170.
- Ohashi, Jun. (2013) *Thanking and Politeness in Japanese—Balancing Acts in Interaction*, NY: Palgrave Macmillan.
- Okamoto, S. & Robinson, W. (1997) Determinants of gratitude expressions in England. *Journal of Language and social psychology*, 16, 411-433.
- Rubin, J. (1983) The Use of "Thank you". Paper presented at the Socio-Linguistics Colloquium, TESOL Convention, Tronto, Canada.
- Schegloff, E. & Sacks, H. (1973) Opening up Closings. *Semiotica* (8), 289-327.
- Searle J. (1969) *Speech Acts: An essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. (1975) Indirect Speech Act. In *Syntax and semantics 3: Speech acts*. New York, Academic Press. 59-82.
- Tomas, J. (1983) Cross cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*, 4(2), 91-112.
- van Ek, J. (1976) *The threshold level for modern language learning in schools*. London: Longman.
- 赤堀由紀子 (1995) 「日本語母語話者の感謝表現—ストラテジーの種類とその使い分けを中心に—」『待兼山論叢日本学篇』29, 49-63.
- 大橋純 (2011) 「感謝の低位概念としてのお礼の談話—互酬性、ポライトネスからの一考察—」『日本語・日本学研究』01, 109-122.
- 小川治子 (1995) 「感謝とわびの定式表現—母語話者の使用実態の調査からの分析—」『日本語教育』85, 38-52.
- 尾崎喜光 (2005) 「依頼行動と感謝行動の<関係>に関する日韓対照」『社会言語科学』08(1), 106-119.
- 金英美 (1995) 「韓国人留学生の<感謝>と<詫び>のあいさつ表現に関する一考察—日本人若年層と比較して—」『国語学研究』(34), 54-43.
- 熊崎さとみ (1997) 「ブラジル人の言語行動『後日お礼を言うこと』について日系人を中心に」『ことばの研究』09, 14-24.
- 熊取谷哲夫 (1994) 「発話行為としての感謝—適切性条件、表現ストラテジー、談話機能」『日本語学』13(08), 63-72.
- 国立国語研究所 (1994) 『日本語教育映像教材中級編関連教材「伝え合うことば」3映像解説書』大蔵省印刷局.
- 胡金定 (2003) 「日中コミュニケーションの違い」『言語と文化』07, 157-170.
- 佐久間勝彦 (1983) 「感謝と詫び」水谷修編『話しことばの表現』筑摩書房.
- 清水崇文 (2009) 『中間言語語用論概論—第二言語学習者の語用論的能力の使用・習得・教育』スリーエーネットワーク.
- 清水崇文 (2012) 「語用論的転移の双方向性—日本人英語学習者とアメリカ人日本語学習者の対照研究—」畑佐一味、畑佐由紀子、百濟正和、清水崇文編『第二言語習得研究と言語教育』150-171, くろしお出版.
- 秦秀美 (2000) 「日・韓における感謝表現」『日本語・日本文化研究』10, 83-94.

- 秦秀美 (2002) 「日・韓における感謝の言語表現ストラテジーの一考察」『日本語教育学』114, 70-79.
- スィリラット, サンタヨーパス (2011) 「感謝の場面での謝罪の発話: 日本語母語話者とタイ語母語話者の意識と使い分け」『一橋大学国際教育センター紀要』(2), 37-55.
- 孫守峰 (2007) 「感謝場面に使用される詫び表現の習得—在中と在日中国人学習者の詫び表現の使用率とパターン—」『日本語・日本文化研究』17, 165-174.
- 田中友愛 (2006) 「感謝表現の日・台対照研究—「定型表現」と「定型表現以外のストラテジー」の使用を中心に—」『日本語・日本文化研究』16, 193-202.
- 谷口龍子 (2010) 「詫びおよび感謝表現の選択と文・談話構造との関わり—日本語と中国語のヴォイスに注目して—」『東京外国語大学論集』80, 179-198.
- 中田智子 (1989) 「発話行為としての陳謝と感謝—日英比較—」『日本語教育』68, 191-203.
- 中道真木男・土井真美 (1994) 「日本語教育における感謝の扱い」『日本語学』13(08), 47-54.
- 生越まり子 (1994) 「感謝の対照表現—日朝対照研究—」『日本語学』13(08), 19-27.
- 日比野新・長友文子 (2000) 「留学生の感謝表現の調査—日本人学生と比較して—」『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』10, 139-148.
- 三宅和子 (1992) 「『感謝』と『詫び』にみるイギリス人とアメリカ人の言語行動」『言語行動論報告』2, 71-83.
- 三宅和子 (1994a) 「『詫び』以外で使われる詫び表現—その多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係—」『日本語教育』82, 134-146.
- 三宅和子 (1994b) 「感謝の対照研究—日英対照研究—文化・社会を反映する言語行動—」『日本語学』13-08, 10-18.
- 吉田愛 (1995) 「『感謝』表現の相手に応じた使い分け—日英語対照研究—」『日本女子大学大学院文学研究科紀要』1, 61-78.
- 横田淳子 (1986) 「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」『日本語教育』58, 203-223.
- ランブクピティヤ, S.M.D.T. (2014a) 「日本語母語話者とシンハラ語母語話者の感謝場面における『人間関係』についての理解と感謝表現—ロールプレイを中心に—」『日本語教育』158, 112-130.
- ランブクピティヤ, S. M.D.T. (2014b) 「日本語母語話者とスリランカ人シンハラ語母語話者の感謝表現ストラテジーの傾向」『比較文化研究』111, 195-208.
- ランブクピティヤ, S.M.D.T. (2014c) 「日本語母語話者とスリランカ人シンハラ語母語話者の感謝場面における「場」の要素についての理解と感謝表現」『言語文化学会論集』(42), 95-116.
- 李華勇 (2014) 「日本語と中国語における『感謝の言語行動』の対照研究」(大阪大学博士論文)
- 李在濬 (2012) 「人間関係による意識と言語・非言語行動の違い—日韓大学生の感謝と挨拶程度の場面に対する行動を中心に—」『言語科学論集』16, 1-12.